

牧師所感：日本の代表詩人逝去 — 谷川俊太郎氏を哀悼 —

筆者は詩（すべて）を詠む才能がない。だが他人の書いた詩を読むのは好きだ。筆者が韓国で牧師になつていなかつた時（学生の時）、韓国で名の知れた詩人達（例えばソジョンジュ「서정주」）の詩をよく読んでいた。

さて筆者が日本で牧師になつて、日本人の詩人達が詠んだ詩を読むチャンスが訪れた。そのきっかけは朝日新聞を愛読するうち、谷川俊太郎氏の詩を読むことになった。以来日本滞在50年間も絶えず谷川氏の詩を読む習慣となった。

ところで筆者の友人の牧師李在雨氏（山武市在住）が詩人で、よく詩を詠んで筆者を楽しませてくれたことも詩が好きな理由の一つである。詩人谷川氏は1931年生れで、筆者より一つ上の兄貴でもある。谷川氏の詩は分かり易く、無頗漢な筆者にも訴えるところがある。氏は2024年11月13日に亡くなられたが、亡くなられた後11月17日(日)の朝日新聞文化欄に、氏の遺稿が発表された。

ここに氏の遺稿の詩を掲載して、氏の死を哀悼する。

感謝

さようなら

私が覚める
庭の紅葉が見える
昨日を思い出す
まだ生きてるんだ
今日は昨日のつづき
だけでいいと思う
何かをする気はない
どこも痛くない
痒くもないのに感謝
いつたい誰に？
神に？
世界に？ 宇宙に？
分からぬが
感謝の念だけは残る

ぼくもういかなきや
なんない
すぐいかなきや
なんない
どこへいくのか
わからないけど

(一部抜粋)

たにかわ・しゅんたろう
1931年生まれ。52年、第1詩集「二千億光年の孤独」を発表。
ユが今月28日、新潮文庫として発売される。



どうからか三口葉が

おわりに氏は幸せな人であった。筆者は今、体を病んでいるが、氏は「どこも痛くない痒くもない」と。幸せな人だったと思う。でも氏は感謝するべき神を知らない。残念である。